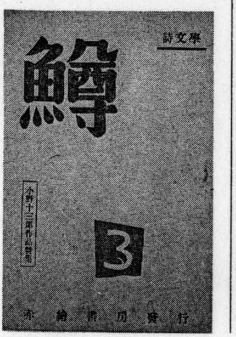
気になるアナキズム詩人
植村諦——治安維持法違反公判調書

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

集書日誌

祖国を愛しない奴が何処にあるか
我々はそういふ愛し方はしない。
そいつらが非国民と呼ぶ様な愛し方
をするのだ。

植村は戦後の詩誌『コスモス』創刊号（昭和21年・4）で「文学者と祖国について」を論じ、〈愛国〉の呪文によって〈国賊〉と呼ばれ、〈亡国の悪鬼〉と呼ばれた戦中に作った、自ら覚える詩の終章をこう書きとめた。第二号（昭和21・6）ではいち早く「私の戦争犯罪について」を書き、〈外の分野の人ならともかく文学者といはれる程の人は、他人を徹底的に追求する前に、まず自分の無力と、弱さを——人間的な、功利的な、小さな利己的な——徹底的に万人の前に曝け出して、自分を洗ひ清めてから立ち上がるべき〉ことを説いた。自己の無力と弱さが、この大戦争を招来したとの存念による。文学者の戦後的出発のあるべきかたちとして共感を覚えて以来、植村諦は気になる存在となった。植村はまた、かつてのアナキズム文化運動の僚友岡本潤が戦後に共産党に入党し、〈今日広場に街頭にひるがえるはよごれたらんるの旗でなくあたらしい鮮明な赤旗である……また私の暗うつぶらいの過去を総決算する意味とをくるめてらんるの旗を詩集の題につかうことにした〉との序文をもつ第四詩集『襤褸の旗』（昭和22）を送られた際、詩誌『鱒』（昭和22・9）に「襤褸の旗は折れて」を書き、〈鮮かな赤旗の前にむざんに折れたらんるの旗よ、私はこの折れたらんるの旗を抱いて、賊劣無頼の道をこの世の唯一つの高貴な思想と生活としてこれからも歩いて行かねばならない〉と記した。



岡本潤は、壺井繁治との二人三脚で、文学者の戦争責任追求の急先鋒となって活動するが、共に戦時中の愛国詩への加担を指摘されるに及んで鉾先が鈍らざるを得なくなり、この問題の追求は中途半端に終ることとなる。

一昨年になるが、町田市の二の橋書店から植村諦こと植村諦聞・二見敏雄ら十九名の治安維持法違反事件（昭和十四年）の第六回・第十二回・第十八回の公判調書の写しを入手した。「私の戦争犯罪について」文中に言う、〈私も戦争直前は自分の力も計らず、支配軍閥共と一戦を交へようとして、下手な政治闘争を計画して見事に失敗して捕まへられ〉た事件である。昨年は石神井書林の目録の植村の第一詩集『異邦人』（昭和7）を取り逃してしまった。今年は『異邦人』となじめるだろうか。